

## 研修報告

# The Rotary Foundation 2007-2008 Group Study Exchange参加報告

向井朗子（岩手看護短期大学看護科）

## はじめに

### Group Study Exchange (GSE) とは

国際ロータリーのロータリー財団によるプログラムで、対になった国の地域間を、若い参加者から成るチームが訪問し合う。そのための旅費として財団が補助金を支給する。チームメンバーは、4週間から6週間にわたり、受入国の制度や生活様式を観察し、他国における自分と同じ職業の実践の様子を見学し、個人的かつ職業上の関係を育み意見交換をする。あらゆる規模の企業、地域社会団体、医療および教育機関、政府機関、非営利団体に勤務する人々がチームメンバーとして受け入れられる。

### 参加資格

GSEチームメンバーの申請者は、以下の条件を満たしていなければならない。

- ・年齢が25歳から40歳までであること。
- ・自身の職業分野で少なくとも2年間の勤務経験を有していること。
- ・現在の職業分野における経験が浅いこと。
- ・派遣地区内に居住もしくは勤務していること。また、居住国の国籍をもっていること。
- ・訪問国の言語に堪能であること。
- ・親しみやすく、自分の意見を明確に述べ、協調性に富み、意欲に満ちたチームの一員としての自覚を備え、自らの職業に熱意を抱いていること。
- ・本プログラムが提供する教育的な価値を最大限に吸収しようとする姿勢を持ち、海外旅行に伴う厳しい内容に耐え、過密な日程を積極的にこなすこと。

### 派遣先

米カンザス州（国際ロータリークラブ第5670地区）

## 派遣期間

2008年4月20日～5月21日

## 派遣メンバー

笹氣光祐（団長：仙台北RC所属）、向井朗子（盛岡北RC推薦：岩手看護短期大学講師）、熊谷宗矩（宮古東RC推薦：酪農家、くがねの牧経営）、浦啓介（仙台RC推薦：宮城県産業技術センター技師）、庄子珠恵（仙台泉RC推薦：英語家庭教師）



## 職業研修について

今回GSEの研修先として、看護教育を行っている大学、短期大学もしくは専門学校、また学生の実習を受け入れている施設を希望した。それぞれの訪問先のロータリアンに、研修日程の調整や受け入れ施設を紹介してもらい、以下の市町村の各施設で職業研修を実施することができた。

- 4/21 ABILENE : Memorial Hospital
- 4/26 GREAT BEND : Surgical and Diagnostic Center
- 4/26 GREAT BEND : Barton County Community College
- 4/29 DOWNS : Golden Living Center (Care Home)

- 5 / 1 CONCORDIA : Cloud County Community College
- 5 / 5 SALINA : Kansas Wesleyan University
- 5 / 6 SALINA : Salina Regional Health Center
- 5 / 9 HAYS : Hays State University
- 5 / 12 COLBY : Colby Community College
- 5 / 12 COLBY : Citizens Medical Center
- 5 / 15 MC PHERSON : Memorial Hospital

## 米国カンザス州の医療施設と看護

### ABILENE : Memorial Hospital

AbileneのMemorial Hospitalは一般の患者の他に会員患者を顧客として迎えており、疾病に罹患した患者の診療だけでなく、疾病予防を目的とした医療を提供している。母体はMemorial Health Systemと呼ばれる大きな組織であり、この組織は、Memorial Hospitalの他にNursing Home（老人施設）やSports and Fitness Center、Hospice、Orphan Asylum（孤児、私生児の入所施設）などを所有していた。孤児、私生児の施設は、定員が100人で、訪問時には60人の子供たちが生活をしていた。日本にもこの様な施設はあるが、定員は数名から十数名であり、施設を利用する子どもの多いアメリカの現状に驚いた。またMemorial Health Systemでは、1年後には、独居できる老人のためのNursing Homeを開設するという話を聞き、日本と同様に、カンザス州も高齢化が進み、高齢者の生活を支えていくビジネスが拡大していると感じた。

### GREAT BEND : Surgical and Diagnostic Center

この病院は、外科治療を主として診療しており、患者の約95%が日帰り手術を受けるといったことだった。手術当日の朝に来院し手術を受け、麻酔から覚醒し水分摂取ができるようになれば帰宅する。入院が必要なケースでも、膝の手術で2日間、股関節の手術で3日間が平均在院日数とのことだった。また、手術後のリハビリテーション開始の時期も非常に早く、人工膝関節置換術では術後3時間後にはリハビリテーションを開始する。手術後3～4日には退院し、その後は外来通院でリハビリテーションを行うとの

ことだった。日本の整形外科での在院日数は約20日間である。手術前の準備期間として3日～7日間、手術後の経過を観察するため約3週間の入院期間を要している。さらに整形外科疾患のリハビリテーションは150日まで診療報酬が認められているため、ほとんどの患者は手術後に、リハビリテーションが充実している病院や施設へ転院するケースが多い現状である。手術を受けた病院での入院期間は、約20日間であるが、転院後のリハビリテーションを目的とした入院期間を考えると、3～5ヶ月と長期になる。患者に優しい制度は、国の財政に厳しいと言うのではなく、双方に優しい医療体制が日本には必要であると感じた。

このCenterは地域間の連携体制も整えられており、Centerで対応できない患者を、どこの病院へ搬送し治療を行うかが、決められており、患者搬送用のヘリコプターが発着する設備も整っていた。日本での「救急患者のたらい回し状態」や「交通渋滞で、救急車が立ち往生」といった問題が発生しないシステムの構築ができていると思った。

### DOWNS : Golden Living Center (Nursing Home)

ここでは、利用者のactivityを大切にするというコンセプトのもと、高齢者の生きがいを支援することに力を入れていた。料理の好きな方には、キッチンを提供したり、ピアノ演奏が好きな方にはピアノを提供したりと、利用者のニーズに応えられるよう細やかな配慮がされていた。また、Quiet Loungeと呼ばれる8畳ほどの広さの部屋があり、可愛い人形や、動物のぬいぐるみがソファーにたくさん置いてあり、一般家庭のリビングのようになっていた。認知症などで、精神状態が不安定になった方が気持ちを落ち着かせる為に利用する部屋である。身体拘束や薬剤で鎮静させる方法もあるが、人の心を大切にす、素晴らしい発想の設備だと思った。もちろん日本の老人施設でも、利用者の活動をサポートする考え方はあり、生け花や書道といった趣味活動を取り入れている施設はたくさんある。これからは、Quiet Loungeのような設備が

普及して欲しいと思った。ちなみにここを利用するためには、2人部屋で\$2452/monthということである。(1\$100円で計算しても、¥245,200/月!!!)

#### COLBY : Citizens Medical Center

入院ベッド数が25床、平均13床の入院患者がいるこの病院は、地域医療施設との連携が密接であった。開業している多くの専門医がこの病院で外来診療を行っており、24時間態勢の充実した診療が行えていた。また外来には、Intravenous injection treatment roomを備えており、診療科に関係なく、各種の注射による治療(点滴による与薬治療)や輸血療法、抗がん剤を投与する化学療法などの治療を実施している。決して規模の大きな病院ではないが、地域や大きな都市との連携を充実するシステムを構築することで、高度医療を住民へ提供することができていると思った。最近、日本で問題となっている産科医療に関しても、この病院では、3人の開業医と連携をはかり、年間150例程度の出産に対応しているということだった。あらゆる分野の医師不足が問題となっている日本でも、患者を助けたいという同じ志をもった者同士が連携することで、社会のニーズに沿った医療が提供できるのではないかと思った。

#### MC PHERSON : Memorial Hospital

この病院は、Robert W. Bobが、Mc Phersonの人々の健康を願い、寄付により設立された病院である。その考えが多くの人々へ共感を与え、現在でも多くの方の寄付に支えられ運営されている。この病院の入院可能ベッド数は60床(外科、集中治療室、内科、救急科、産科)で、平均約47床が可動しているとのことだった。特に私が興味を持ったのは、薬剤やサプライ(注射器や消毒用キッドなど)の管理についてである。これらの物品は、全て鍵のかけられたBOXへ収納されており、取り出す際には使用者の個人番号を入力し、指紋の照合が必要である。いつ、誰が何を取り出したかを全て記録するシステムを導入することで、薬品や医療用品の管理が確実に行なわれ、事故や事件の防止にもつながっていると思った。次に救急外来の処置室を見学

した。処置室は全て個室であり、それぞれの部屋の天井のライトに、犬や飛行機や気球などの写真が映し出され、天井を見るとふっと笑いたくなり、リラックスできる環境に工夫されていた。小児の救急患者の診察や治療をスムーズに実施するには、非常に効果があるということだった。救急外来であるにもかかわらず、このようなユーモアのセンスを取り入れているところは、アメリカならではの発想であると感じた。さらに救急外来には、HAZMAT AREAと呼ばれる施設があり、化学薬品の事故に対応することができる。カンザス州は農業の盛んな地域のため、農業による被害を受けた患者が使用することが多いということだった。

工作中にチョコレートを食べたり、ジュースやコーヒーを飲んだり、廊下で女装した男性医師とすれ違ったり、日本では到底考えられない職場環境であったが、仕事を楽しみ、遊び心を取り入れるセンスは見習いたいと感じた。

#### 医療施設研修のまとめ

日本と米国の医療制度には大きな違いがあり、その事を論じるつもりはない。しかし、在院日数の短い米国の看護師は、看護する上で患者の心理的な問題に悩まされることはほとんどないと言っていた事が印象深かった。日本では、病気になる入院した患者の悩みやストレスといった心理的な側面にも目を向けるよう教育し、また臨床現場では実践している。米国の医療現場を知る事で、日本の看護の素晴らしさを改めて実感することができた。また、同じ看護を職業としている者として学ぶことが多かった。研修先であるどの医療施設も、職員が非常に生き生きとした笑顔で働いていることが印象的であった。そして、自分の仕事に自信と誇りを持って働いていると感じた。私たちは、一日の約75%仕事のことを考え生活していると言われている。その多くの時間を、どのように過ごすかは自分の気持ち次第であり、せっかくなら楽しく過ごしたいと思った。不満な思いで1日を過ごすのか、それとも楽しく1日を過ごすのかを決めるのは自分である。AMERICAN SMILEは、私に

そんな考え方を教えてくれた。

## 米国カンザス州の看護教育

### GREAT BEND : Barton County Community College

このCollegeには14学科あり、Health, Physical Education : College Nurseコースを選択し学習するとregistered nurseのライセンスが習得できる。Community Collegeとは、日本でいう専門学校に相当する教育機関であり、職業訓練校のような位置づけである。Community Collegeの職員には、教授や准教授という役職はなく、すべてinstructorという役職であり、どの教員も教科書的な講義だけではなく、実践指導の能力を備えている。College Nurseコースには6人のnurse instructorが常勤していた。定員が30人で2年間の教育コースである。日本と同様に、学生は講義や学内実習そして臨地実習を修めregistered nurseのライセンスを習得する。

### CONCORDIA : Cloud County Community College (CCCC)

この看護学科における研修では、日本とアメリカの看護学生の志望動機の違いに驚いた。日本では「人の役に立ちたい」や「看護師に憧れている」と言った動機で、高校卒業後すぐに看護師を目指す学生が多いが、アメリカでは、「生活するために、所得の安定している看護師の職業を選択する」という考え方で、社会人を経験した学生が大半だということだ。そのため40代の学生も珍しくないという。このような志望動機の違いが、学生の学習意欲にも反映されていると思った。日本では看護を学び始めてから「こんなはずではなかった」「自分は看護師に向いていない」「他にやりたいことがある」と言う理由から、精神的にナーバスになり、学習意欲が低下したり退学を希望する学生が多い。しかしアメリカでは看護師になりたい意志は強いが「勉強についていけない」「家庭の事情」という理由で退学せざるを得ない状況のようである。CCCCの看護学科は、2年間のコースで定員40人に対し、常勤の教員3人と病院での実習を担当する非常勤教員が2人いる。述べ80人

の学生を3人の教員で教育しなければならない厳しい現状であった。そのため学生のレポート課題は全てメールで受け付けるシステムが導入されており、教員は自宅でも仕事をすることだった。また、学内実習施設がCommunity Collegeから約3 km離れた場所にあり、教育環境の厳しさも伝わって来た。その様な教育環境においても、将来を担う看護師を育てたいと熱意を持って教育していることに感銘を受けた。

### SALINA : Kansas Wesleyan University

この大学の教育方針はhigh quality educationということであった。4年間で126単位を取得するカリキュラムであり、看護学部の定員45人に対し、看護教育専任の常勤教員7人、実習指導のための非常勤が4～5人いる。この看護学部の教育方法で特徴的だったのは、シミュレーションを用いたロールプレイ学習を取り入れていたことである。病室を想定した3畳ほどの部屋に、コンピューターで患者の病気や症状を設定できるシミュレーション患者を寝かせ、学生に看護を学ばせていた。実習室にはカメラが設置されており、看護師役の学生がシミュレーションに看護している状況を撮影し、別室でその様子を教員や他の学生が観察し、評価する学習方法を取り入れていた。他者を評価することや、自分の行動を後から振り返ることで、学習効果が上がっているということだった。看護を学ぶ上でのhigh quality educationが、このような形で確実に実施されていると思った。

### SALINA : Salina Regional Health Center

ここでは理想的な看護の教育施設で研修をすることができた。Salina Regional Health Centerは、地域の小さな病院であり、その病院のone floorが看護学生の実習施設になっていた。

1～3階は病院として機能し、4階が実習施設になっていた。施設構造は病院そのものを活用し、病室にはシミュレーション患者を寝かせ、臨場感がある学習環境であった。1名の学生が実習中で見学することができた。病室で手術後患者の状態を観察したあと、ナースステーションへ戻り、得られた情報を分析し、それを医師へ電話で報告するという実習内容であった。患

者との会話は、シミュレーション人形にマイクが内蔵されており、学生のインタビューに対して教員が答えるようになっていた。この実習施設には専任の教員が3人おり、5つの学校から年間約100人の学生を受け入れているということだった。カンザス州からの補助を受けながら、病院が経営しているユニークかつ理想的な実習施設であった。



#### HAYS : Hays State University

この大学の看護学部では、実践力の向上を目指した教育の一つとして、situationを設定した学内実習を実施していた。患者への援助を学生自らが考え実施できるよう、患者役のモデル人形へ化粧をしたり、様々な治療用の装具を装着したり、また嘔吐した患者への援助を学習する教材として、リアルな吐物まで作成し使用していた。このようにsituationを設定した環境で学習することで、実際の場面に遭遇した際、学生がパニックにならないという学習効果が明らかになっているということである。この実習室には専任のinstructorが2人いて、学内実習の運営やsituation作りに工夫を凝らしていた。また、この大学では、教員1人あたりの担当学生が10人を超えない体制がとれるよう人的環境を整える努力をしているとのことであった。しかし、現実には教員不足が問題だとも話していた。日本でも、新卒者の実践力の低下が指摘されており、私たちが様々な学習方法を考え工夫している。そして、日本でも、看護の教員不足が悩みの種になっている。この研修から、日本とアメリカの看護教育現場における共通点が多くあることが分かった。

#### COLBY : Colby Community College

定員30人の小規模なCommunity Collegeであったが、カンザス州からシミュレーション患者の人形が支給され看護教育へ活用されていた。ただし、看護教育を充実させ、今後は定員を増員するという契約を結んだ上でのシミュレーション支給とのことであった。このCollegeの学生は18歳～50歳代と幅広い年齢層で、20歳代後半～30歳代の学生が最も多いとのことであった。

「50歳を過ぎてライセンスを習得しても、実際に働けるのは数年ですよ。」と質問すると、「退職後は、ライセンスを生かしてボランティアをするのよ。」と言う答えが返ってきた。アメリカはボランティア活動が盛んな国であるが、その底力は、このような考え方を持つ人が多いからだと感じさせられた。自分のできる事を社会へ提供するという思想が、日本にも浸透してほしいと思った。

#### 看護教育機関研修でのまとめ

今回、研修した全ての大学、Community Collegeではコンピュータで100例以上の病気や症状がプログラミングできるシミュレーション患者のモデル人形を所有していた。病院研修で述べたように、アメリカは、日本と比較し在院日数が非常に短いため、看護師の仕事内容は、患者の状態観察（フィジカル・アセスメント）、と与薬の管理（内服薬や注射の管理）が中心になる。そのため、看護教育もその部分が中心のカリキュラムとなっている。もちろん本学の看護教育も患者の観察方法や治療を受ける患者の管理について学んでいる。しかしそのことと同様に、患者と親密なコミュニケーションを図りながら、入浴できない患者の体を拭いたり、足を洗ったりといった日常生活の細やかな援助を行う技術の習得にも力をいれ教授している。アメリカでは、Hospiceで実施されるような看護を、日本の看護師は日常的に行っていることが、教育内容の違いに現れていると思われる。

## 米国カンザス州の医療施設および看護教育を体験し考えたこと

患者との会話を楽しみ、共に悩んだり悲しんだり、また喜びを分かち合ったりする日本の看護に人間愛が存在することを感じた。しかし、それは決してアメリカの看護を否定しているわけではない。日本とアメリカでは病気や治療に対する考え方、国としての保険制度の違いなどがあり、単純にお互いの看護を比較することは難しいことである。ただ今回の研修を通し、双方の国の違いを少しだけ理解することができ、その上で日本の看護の素晴らしさをあらためて実感することができた。

## Host familyとの交流

この研修で、7軒のHost family宅へ滞在した。3泊～4泊の短期間の滞在にもかかわらず、Hostの笑顔と暖かいもてなしの心が、私の心の中にジンワリと染み込んでくるような経験をたくさんさせてもらった。生涯忘れる事のできない感謝の気持ちを私に教えてくれた、American familiesを紹介したい。

ABILENE : LYNN & POLA PETERSON

GREAT BEND : BILL & MARY KING

CONCORDIA : TOM & SUZY TUGGLE

SALINA : CLAY & JUDY EDMANDS

HAYS : CHARLES & LOUISE REESE

COLBY : PAUL & SHARON STEELE

MC PHERSON : JAN & MEG VAN ASSELT

ABILENEでは、アビリン市長のご主人と、小学校の英語教師をしている奥様のお宅へ滞在した。毎朝breakfastを作ってくれるご主人の後ろ姿と、毎晩夫を褒めちぎる奥様の仲睦まじさが印象的なカップルだった。

GREAT BENDでは、元産婦人科医のご主人と、教育委員会に勤務していた奥様のお宅へ滞在した。彼らは、このプログラムでより多くのことを体験できるようにと、様々な企画をしてくれた。

CONCORDIAでは、元裁判官のご主人と、中学で美術を教えていた奥様のお宅にお世話になると聞いていたので、性格が固い方なのだろう

と勝手にイメージし、非常に心細く不安で一杯だった。しかし「Akiが来るのを待っていた」「あなたの家にいるようにくつろいで」などと優しく声をかけてくれ、私の緊張を和らげるように穏やかに接してくれた。アメリカと日本の歴史や文化、お互いの家族のこと、趣味のことなど話ながら、楽しく過ごす事ができた。「私たちには2人の娘がいるが、Akiは3番目の娘だよ」と言われたときには、心の中が、ジーンと熱くなった。

SALINAでは、料理上手な奥様の美味しい手料理をご馳走になりながら、話し好き（ジョーク好き）な元病院経営者のご主人との会話がはずんだ。ご主人はNAVYの経験があり、沖縄や横須賀、函館など約8ヶ月間日本へ滞在した経験があるということだった。

HAYSでは、毎年のようにGSEプログラムなどの海外からの訪問者をホストしているご夫婦のお宅へ滞在した。孫と向かい合い「My name is……」「This is a……」と言葉を教えている奥様の姿に、「あ～、私も習いたい」と切実に思った。笑顔がたえない明るい家庭であり、笑顔は人から人へと伝染することを、証明しているような家庭だった。

COLBYでは、ひまわりグッツに囲まれた生活をしているスティール夫妻のお宅へ滞在した。ご主人は元会計士、奥様は街の名家の出身であった。奥様は「ひまわり」が大好きで、家の至る所にひまわりが飾られていた。ちなみにカンザス州の花はsunflower（ひまわり）です。今年の2月まで、体調が悪く治療をしていた奥様は、気持ちも笑顔もひまわりのように明るい素敵な女性だった。

最後の滞在先のMC PHERSONでは、相手地区のGSE委員長のアサルト夫妻のお宅へ滞在した。ご主人は大学でドイツ語を教えていたとのこと。彼らは大の親日家で、私は熱烈な歓迎を受けた。「私たちには、とても親しい日本人の友人がいて、彼のことが大好きなの」と話してくれた。その方をguestに招いてのdinnerは、本当に楽しく笑顔がたえない時間を過ごした。私にとって、全く見ず知らずの日本の方のおか

げで、hostが私のことも好きになってくれていることを実感した。この経験から、自分の言葉や行動や態度は、必ずしも自分だけに返ってくるのではなく、自分の知らない誰かのために役立つということを学ぶことができた。人はみんなつながっているということを実感することができた素晴らしい出逢いだった。

MC PHERSONでのFarewell partyでは、メキシコ、イギリス、ドイツ、スウェーデン、アフリカなど、各国の料理が並べられた。それらは全て、partyへ参加したロータリアンの皆さんの手作り料理だった。皆さんは、アメリカで生まれ、アメリカで生活している、アメリカ国籍を持ったアメリカ人なのだが、彼らのrootはアメリカではないということを説明された。それは、彼らの祖先が移住してアメリカを作ってきたという歴史である。彼らには、二つの国のアイデンティティが備わっていると感じた。その両方の文化をととても大切にしていると同時に、自分と違う他の文化を受け入れることもスムーズにできていると感じた。このような人々と生活をともにすることができ、短い期間ながら本当に多くの事を教えていただき感謝している。



## おわりに

自分の国の歴史や文化を知る事、それを大切にして次の世代へ伝えていく事、それを伝える言葉（日本語も外国語も）を身につけなければならないと実感した。言葉がなくても心で通じ合えるとは言っても、やはりその国の文化を理解し、人々と交流するためには、その国の言葉を使える必要がある。そしてSMILE！笑顔はコ

ミュニケーションの基本だと再認識した研修であった。